

ポロック絵画における観者の参加：デューイ受容をめぐる一考察

岸 みづき（早稲田大学）

本発表は、ジャクソン・ポロックによる 1942 年から 50 年の絵画作品に着目し、その制作手法の実践とジョン・デューイの経験主義的芸術論との関連性を検討する。ポロックは 1947 年頃からドリッピング（ポーリング）の手法を用い始めるが、それまでも多様な制作手法を試みている。それらの手法に関し、ピカソやシュルレアリスト、あるいはメキシコ壁画家シケイロスらの影響がたびたび指摘されてきたが、グリーンバーグのポロック論に代表されるように、モダニズムの視座においては制作手法それ自体が作品の本質的な問題となることはなかった。一方、ドリッピングの作画行為にヨーロッパ近代絵画の伝統を逸脱した実存主義的自己表出を見出すローゼンバーグのアクション・ペインティング批評や、モダニズムの視覚的現前性に代わり「指標」および「水平性」の概念を用いてポロック絵画を再解釈するクラウスのように、制作過程に重点をおいたポロック論も提示されるが、これらの言説には反モダニズムの批評的戦略が多分に存在することも無視できない。ポロックの制作手法が根ざす理論や思想を、同時代言説において詳細に検討した研究はいまだ十分になされているとは言い難い。

近年では科学的調査による技法や制作過程の検討も行われている。そうした研究を踏まえ、本発表では最初の一連のポロック絵画の制作過程を再構成することを試みる。そこで示されるのは、1942 年以後、多くの作品が段階的な手法で制作されるようになり、各段階での作画行為を観者に向けて視覚的に開示する構造をもつという点である。次に、そうした構造をデューイの『経験としての芸術』（1934 年）に即して解釈する。芸術の観者に対する能動的な働きに着目するデューイは、作者の制作面の知覚と享受としての観者の知覚の間に区別を設けず、両者に等価の「経験の創造」を見出す。本発表では、ポロック絵画における制作過程の開示は、デューイの言う経験の創造に向け、観者に対し制作行為の知覚へと参加を要請するものであると解釈する。最後に、1920 年代以来のアメリカ美術におけるデューイ受容の変遷を追い、40 年代のポロック周辺では新たなデューイ解釈に基づく芸術論が提示されていたことを明らかにする。ポロックがデューイを読んでいたことを示す資料は見つかっていないが、30 年代に公私ともに影響を受けたベントンやその周辺にはデューイとの直接的な関係があったことから、早くからその思想に触れていた可能性は大きい。また 40 年代より親交のあったマザウエルの著作には『経験としての芸術』からの影響が見られる。さらに、マザウエルを通じてデューイを知ったパーレンによる『ディン』誌の論考には、デューイが提唱する「コミニオン」としての芸術観と、ポロックが強い関心を寄せていたインディアンの儀礼文化との接続がなされている点にも着目する。以上のような検討により、本発表は従来二者択一的なモダニズム／反モダニズムの議論を離れ、ポロック絵画に新たなコンテクストを与えることを目指す。